



こーひーぶれいく

To dance is to be out of yourself. 踊ることは自分から抜け出すこと

東 達也

Higashi Tatsuya

クラシックバレエを始めて14年になります。最初は身体のメンテナンス目的に週1回京都の自宅近くで「バレエストレッチ教室」に通う程度でしたが、今ではすっかりバレエを中心に生活が回っている有様です。わずか2時間ほどのレッスンで身体はくたくた、頭は空っぽになりストレス解消、心身共にリフレッシュでき、ただただ楽しいですね。現在の課題は足裏と足首の強化、現代人はいかに「足」を甘やかしているかを実感しつつ、日々筋トレ、柔軟、身体のケアで怪我と戦いながら、気持ちよく身体を動かしています。

きっかけは2010年秋、欧州核医学会の際、ウィーン国立歌劇場で同行した妻と一緒に観たバレエ「オネーギン」でした。妻によると感動した私は「やってみたい」と口走ったらしく、帰国後早速妻が前述の教室に入会、一緒にやろうと誘われたものの躊躇していましたが、翌年3月東日本大震災が発生。震災を機に、仕事への向き合い方も私自身大きく変わり、私生活でも思い切って新しいことに挑戦してみようと考えた次第です。

元々スポーツ好きの私は、少年野球、中学高校では柔道部、趣味が筋トレというタイプでした。一方で、三姉妹に挟まれた男一人として育ち、少女漫画を愛する私は、山岸涼子先生のバレエ漫画「アラバスク」のファンであり、プリンスやマイケルジャクソンに熱狂し、80年代ディスコを愛する大学生でした。バレエの素地はあったのでしょうか。とは言え、当初中年男性のバレエには抵抗があり、そもそも大人から始めてまともなバレエができるとも思えず、踊りたいという気持ちもさほどなかったです。無駄な体表の筋肉をそぎ落とし、体幹を中心に「軸」を



コンクール会場にて、妻と（2023年）

強化する肉体改造がただ楽しく、これに専念した最初の10年間でした。

ところが、記念にと薦められ妻と出場した大人向けコンクールのアンサンブル部門で幸運にも第1位となり、これを機に教室も移籍、大きく状況が変わりました。新教室では踊り中心の指導となり、難しいジャンプ技にも挑戦、海外バレエ団でプリンシパルを務めた先生からの直接指導に、美しく優雅に踊りたいという気持ちも生まれ、（仕上がりはともかく、）ソロのバリエーションを発表会で踊るまでになりました。還暦ながらも健康に身体が動き、こんなにもキラキラ？したバレエ生活を送れる喜びを噛みしめると共に、これまで辛抱強く指導して下さった多くの先生方、またきっかけを作ってくれた妻に感謝しています。

題名はアメリカの舞踏家デ・ミルの言葉。舞踏に限らず、これまでの自分を脱ぎ捨て新しい自分を発見する喜びと怖さを的確に表現した名言だと思います。「ピルエット（回る技）が1~2回しかできない人が5回、10回を目指すには、自分の型を土台から再構築しないと次のステージには行けない。しばらく回れなくなるが、一旦捨てる勇気が必要」最初の教室でのこの言葉も私に大いに刺さりました。現在私はQSTで新規の放射性治療薬の開発研究に携わっていますが、とても日常診療の片手間にできる仕事ではないと、核医学臨床医としてのキャリアを捨てる覚悟で臨んだことが思い出されます。いつまで続けられるか分かりませんが、バレエも仕事も挑戦する気持ちを大事に、これからも踊り、もがき続けたいと思っています。

（量子科学技術研究開発機構 量子医科学研究所）